



： 卷 頭 言 ：

数字は人がつくるもの — 観察力を磨き、洞察力を備える —

(財) 日本植物調節剤研究協会 会長 小川 奎

植調協会では、農薬メーカーが開発中の除草剤・生育調節剤の実用性を判定するために、多くの精密な試験とその試験成績を吟味する検討会を実施している。その判定の根拠となっているのは、試験が行われた条件と試験結果を表した「数字」(データ)である。この「数字」は、事実を記録した客観的な科学データとして、権威あるものと受け止められているが、「数字」は人がつくるものである。

実験や処理によって生じた反応や現象を、ある目的や考えに沿って記録し比較し易いように、試験担当者が「数字」に置き換えるのである。「数字」も「言葉」と同じ表現の一つである。温度や長さ、重さなどは絶対的な値で、主観が入り込む余地はない「数字」に思えるが、どの場所の温度を測るのか、どの個体や部位の草丈や重さを量るのかは、その試験担当者の判断に委ねられている。

さらに、基準と比較する相対的な「数字」、例えば、両極の値の中間を示す「平均値」は必ずしも実際には存在しない便宜的な値であり、また、「割合・比率」は母数の大きさがマスクされた値であり、事実が抽象化されている。

このように試験担当者は、試験結果を適切に表現するために、そして、ある一定の基準や仮説に基づいた考察を行うために、「数えるべきもの」「数え方」「伝えるべき数字」を選ぶのである。

共通的な試験方法や調査の手順をまとめたものに「実験マニュアル」がある。このなかには、これまでの経験や蓄積を踏まえたノウハウが効率よく体系化されているので、マニュアルに従った試験研究を行うべきではある。しかし、

フィールド試験などでは、思いもよらない反応や現象、あるいは僅かに感じる微妙な違い、さらには再現性を疑いたくなるような試験区間の振れなど、マニュアルの範囲を超えた事態に遭遇し、往々にして戸惑う場面も多い。

このような時こそ、研究者の資質が試されるのである。「マニュアル」は一般的な「作法」を示したものであって、解析するためにどう調査し「数字」にするか、いわゆる研究者としてのパフォーマンスが、いわゆる作品に相当する「お手並み」に当たる。

ここで、即席麺のスープの開発を任されたある大手食品メーカーの食品開発部長の物語(毎日新聞)は示唆に富む。13年間にわたって、1000店を超えるラーメン屋を巡りスープの味を調べ歩いている達人として紹介されている。彼が調査し記録するのは、具材と判別できたスープ素材など約20項目に上るが、そのなかには味とは直接関係ない事項、例えば、のれんの色や席数のデータ、さらには店の外観の写真などが含まれている。その理由は、「味は感覚であり、それを文字にすべて置き換えるのは難しい。その場の雰囲気を出し出す状況を幅広く記録し、後にその味を頭の中で再現しやすくしている」ということである。「味が生まれる背景まで見通す」という調査に対する姿勢は、単なる「観察」の域を超え、「洞察」といえる。

このように、試験結果を「数字」としてデータ化することは、試験研究の根本的な問題ではあるが、常に研究者としての感性が問われる課題でもある。「観察力」を磨き、「洞察力」を備えた試験研究に期待したい。